

ウェルネスツーリズムをめぐって

—巻頭言に代えて—

観光学部副学部長
増子勝義

本紀要も二号目を迎えることとなり、感慨深いものがあります。本観光学部が開設されたのは今年の4月ですが、私にとってはとても紀要のことまでは頭が廻らないという状況が続いたからです。ですから、本紀要は、執筆された先生方の深い思い入れによって作られているといっても過言ではありません。先生方に深く感謝いたします。

ところで、学科名に冠したウェルネスツーリズム (Wellness Tourism) とはいったい何でしょう？
まず、ウェルネス (Wellness) とは、端的に「ヒトとコミュニティの健全な状態」を意味します。ウェルネスツーリズムとは、「ヒトの心と身体、そしてコミュニティの広い意味の健康を旅をとおして実現していくこと」です。目的という点から考えると、ヘルスツーリズムや癒し、エコツーリズムやグリーンツーリズム、ブルーツーリズムといったことも含まれてきます。

ヘルスツーリズムとは「(団体ではなく、) 主体としての個人が健康という目的あるいは価値を持って、ある程度長期滞在するあるいは幾度か継続して通う」ような旅を指します。また、エコツーリズムとは、「地域 (コミュニティ) の自然や文化への理解を深め、よりよい保全とゆとりある活動により、みずみずしい観光と産業を持続的に発展させる運動である」(JES) とされます。

しかし、これだけではなぜことさらにウェルネスを強調することになるのかを明らかにしたことはならないので、さらに説明を続けます。

全国に30校以上あるといわれる観光系の学部学科のどれもがホスピタリティとそのマインドの習得を標榜しています。この点については私どもも同じです。しかし、21世紀の新しい観光におきましては、ただ待っているだけで、たまたまいらしたお客様に「ひとりよがりのおもてなしのようなこと」をしても始まりません。お客様の深いところでのニーズを理解することが必要となってきます。私たちは、その手がかりをウェルネスにおきたいと考えています。

ヘルスツーリズム研究所 (JTB) の調査 (2006年3月) によれば、「質の高い生活」のイメージは、1位が「家族が健康であること」(69.5%) で2位が「自分が健康であること」(63.1%) であるといえます。また、「健康」をテーマとした「宿泊旅行」に行きたい人は6割、「健康」をテーマとした「日帰り旅行」に行きたい人も6割にのぼるそうです。

したがって、(とくにハンガリーでは) ライフスタイルや人生観にかかわる言葉であり、人生哲学

であり、生きていくことへの意識的努力をあらわすとともに、自分自身の健康と総体としての生活の質に関して自分自身が責任を持つという考えをも内包するウェルネスを追及することは、人間としてのお客様理解につながるのです。

同語反復に陥っていることを承知で言えば、ウェルネスを知ってこそ「健康と幸福を求めて人生の旅をしている」お客様の気持ちを大切にサービスができるのではないのでしょうか？

このことから、本学部では「ウェルネスリーダー」を推奨資格の1つにしているのです。話題が手前味噌で大変恐縮ですが、巻頭にあたり私なりの概念整理をさせていただきました。